

伊勢国分寺跡

第29次発掘調査現地説明会資料



遺跡の位置と周辺の遺跡(1/50,000)

1. はじめに

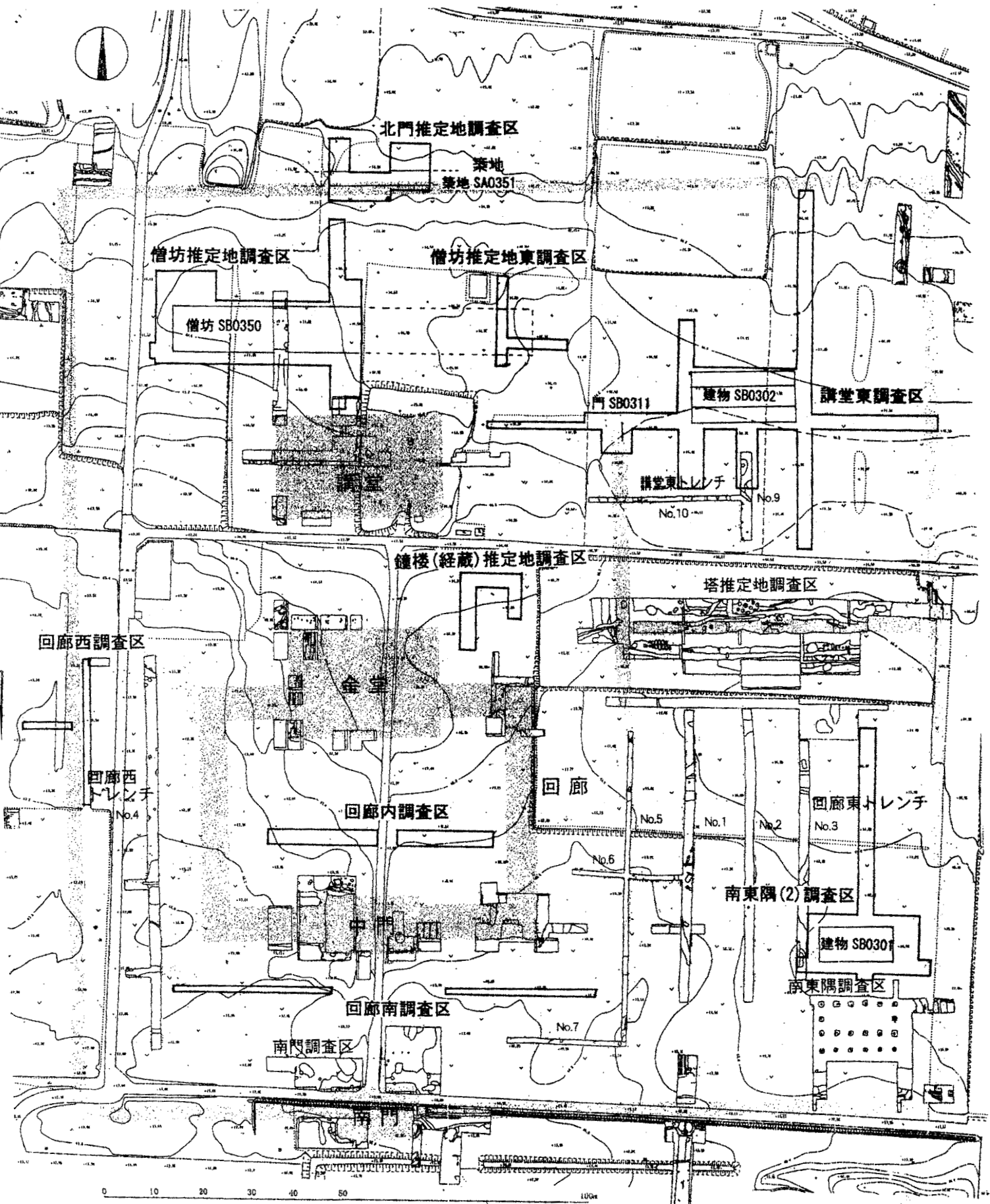
国分寺とは奈良時代、^{しゅうむ}聖武天皇の^{みことのり}詔（741年）により各国に置かれた寺院です。その背景には、仏典の教義にもとづき国家を平安に治めるとい^{ちんごこっか}鎮護国家の理念がありました。国分寺は僧寺「^{そうじ こんこうみょうしてんのうごこくのてら}金光明四天王護国之寺」と尼寺「^{にじ ほうけめつざいのてら}法華滅罪之寺」からなります。鈴鹿市^{こくぶ}国分町に所在する伊勢国分寺跡は、大正11年10月12日に国の史跡に指定されました。この史跡は僧寺の遺跡と考えられています。尼寺の遺跡は現在の国分町の集落一帯の国分遺跡がそうではないかと考えられています。

昭和63年～平成2年に行われた^{ついじべい}範囲確認調査により、180m四方の^{がらんち}築地塀に囲まれた寺域（伽藍地）が確認されました。その成果をもとに鈴鹿市では史跡の全域およびその周囲の公有地化を平成7年から平成9年にかけて完了しました。

平成11年度から、史跡公園整備に先立つ^{がらんち}伽藍（主要な堂塔）確認の調査に着手しました。同年度の調査では、まず^{こうどう きたん}講堂の基壇（建物のベースとなる土壇）が確認されました。平成12年度には^{こんどう}講堂と金堂の調査を行い、講堂基壇の規模が東西32.7m×南北20.6mであること、金堂基壇の創建期の規模が東西30.5m×南北21.9mであることを確認しました。平成13年度には、東西19.5m×南北11.9mの中門基壇と、中門と金堂を結び金堂院を構成する東西68m×南北51m、幅7mの^{かいろう}回廊を確認しました。平成14年度には南北11.2m×東西17.6mの規模の南門基壇を確認したほか、^{がらんち}伽藍地の東1/3が南北方向の築地塀によって区画され、その内部がさらに東西の築地塀によって分けられ北東と南東の2つの^{いん}院（区画）を成していることがわかりました。伽藍地の南東隅からは大型の^{ほったてはしらたても}掘立柱建物も見つかりました。

2. 今年度の調査

これまでの調査の結果にもかかわらず、^{そうぼう しょうろう きょうぞう}僧坊、鐘楼、経蔵、塔そして南門以外の門といった伽藍が未確認です。これらを確認するために「僧坊推定地」「僧坊推定地東」「北門推定地」「鐘楼(経蔵)推定地」「回廊内」「回廊西」「回廊南」の調査区を設けました。また、昨年度確認された北東・南東の院がどのような性格であるかもまだわかっていません。そこで北東の院に「講堂東」、南東の院に「南東隅(2)」の調査区を設けて遺構の確認に努めました。遺跡の保存のため調査はなるべく遺構検出までにとどめ、堆積状況や切り合い関係を確認しなければならぬ場合のみ最小限のサブトレンチを入れて断面の確認をおこないました。



伊勢国分寺跡第 29 次発掘調査区位置図(1/1,000)

3. 調査の成果

【僧坊推定地・僧坊推定地東調査区】

僧坊(SB0350) 僧の宿舎となる長屋状の建物です。^{モセキ}礎石^{カワラフシ}建ち瓦葺の建物と思われませんが、基壇は全く削平され、^{キモチギョウ}基礎地形(地下の基礎工事)の痕跡も見当たりません。外周に掘られた溝も、東調査区の SD0342 が比較的良好に残るほかは、削平されるか何らかの攪乱を受けています。わずかに残る外周溝と基壇の部分を避けるように掘られた中世以降の溝から推定される基壇の規模は南北9m(30尺)×東西72~73m(240尺?)です。

^{コンロウ}軒廊(SC0360) 建物間を結ぶ廊下です。僧坊基壇同様に全く削平されています。西側の瓦溜溝 SD0361 と講堂の伽藍主軸から幅6m(20尺)の軒廊が講堂と僧坊を結んでいたと推定できます。

その他の遺構 国分寺以前に建てられていた^{ほったてばしらたてもの}掘立柱建物3棟、古墳時代後期の^{たてあなじゆうきよ}竪穴住居3棟、^{どこう}土坑(穴)2基、中世以降の溝、土坑、ピット多数が検出されています。古墳時代土坑は炭、焼土を多く含み、1基からは多^{はじき}くの土師器、^{すえき}須恵器が出土しました。

【北門推定地調査区】

北辺築地(SA0351) 上部は全く削平され、内外の側溝 SD0352・SD0349・SD0358 から推定できます。基底幅は約3mです。SD0352 からは^{はいゆうとうき}灰釉陶器の浄瓶、^{じゆへい わん}碗、^{りやうゆうとうき}緑釉陶器碗などが出土しています。

北門(SB0359) 北辺築地の内側の溝 SD0349・SD0358 の間がちょうど9m(30尺)途切れていました。その位置が伽藍中軸線に一致することからここに門が存在した可能性が高いと考えられます。

その他の遺構 中世以降の溝、土坑が検出されています。

【回廊内調査区】(埋め戻し済み)

国分寺と直接関連する遺構は確認されませんでした。金堂基壇を壊した際の整地層が確認され、大量の瓦類が出土しました。鬼瓦も出土しています。

その他の遺構 国分寺以前の掘立柱建物2棟、竪穴住居3棟、中世以降の土坑、ピット、溝を検出しました。

【回廊南調査区】(埋め戻し済み)

国分寺と直接関連する遺構は確認されませんでした。

その他の遺構 古墳時代の土坑1基、中世以降の土坑、溝を検出しました。

【回廊西調査区】

西辺築地(SA0367) 上部は全く削平され、内外側溝 SD0368・SD0369 から、約3mの基底が推定されます。

その他の遺構 中世以降の瓦溜り土坑を検出しました。

【鐘楼(経蔵)推定地調査区】

土坑(SK0340) 南北10m、深さが0.8mあまりある巨大な土坑です。上層は瓦溜り、下層は黒褐色土が堆積しています。金堂改修に伴う土取り、廃棄土坑とみられます。

その他の遺構 中世以降の瓦溜り土坑、近世以降の道路痕跡を検出しました。

【講堂東調査区】

掘立柱建物(SB0302) 東西7間(柱と柱の間)×南北2間の身舎(建物の中核となる部分)に、南北に庇(屋根を大きく取るために身舎の周囲に1間分を加えた部分)を持つ二面庇掘立柱建物です。柱間は桁行き3m(10尺)、梁行き2.25m(7.5尺)で、21m×9m、床面積189㎡とかなり大ぶりの建物です。柱掘方(柱を据えるための穴)には1mを超える大きなものがありますが、形や並びはあまりよくありません。

土坑(SK0307・SK0309・SK0310・SK0327ほか) SB0302の周囲に位置する土坑群です。SB0302との切り合い関係が無くSB0302に伴うものと見られます。いずれも瓦片、須恵器、土師器等の土器類、炭や焼土を多く含みます。SK0309からは志摩式とよばれる製塩土器も出土しました。

掘立柱建物(SB0306) 南北2間×東西3間以上の東西棟の掘立柱建物です。柱間は桁行き21m(7尺)、梁行き2.25m(7.5尺)です。SB0302とほぼ方位が揃っていますが、SB0302に伴う土坑群の1基を切っており建てられた時期は降るため、SB0302の後に建て替えられたものとみられます。

築地(SA0316) 上部は全く削平されていますが、両側の溝 SD0314・SD0312・SD0313 から推定できます。基底幅約2.5mです。第28次調査で検出された築地 SA0206 に続くものです。

門(SB0311) 築地 SA0316 の東側の溝 SD0312・SD0313 の間が約3m途切れ、それにぴったり合うように築地 SA0316 の基底部上に2基の柱穴が3m(10尺)の間隔で検出されました。簡易な掘立柱の棟門と考えられます。SD0314 上面からは退化した型式の鬼瓦が出土しています。

東辺築地(SA0370) 上部は全く削平されていますが、内外の溝 SD0371・SD0372 から推定できます。基底幅約2.5mです。SA0316からの距離は芯芯で約63.5mです。

その他の遺構 古墳周溝1基、竪穴住居1基、国分寺に平行する時期の大溝1条、中世以降としてはピンに

収められた^{そうこつき}蔵骨器1基、掘立柱建物の柱穴、焼土坑1基、溝、瓦溜り土坑、ピット多数があります。

【南東隅(2)調査区】

掘立柱建物(SB0301) 東西5間×南北2間の掘立柱建物です。柱間は桁行き3m(10尺)、梁行き3m(10尺)です。柱の掘方はおよそ1mで整然と並びます。柱痕(柱の跡)^{ちゅうこん}もよく残っています。北側に平行して小柱穴が並び、作業用の足場穴であるかもしれません。第28次調査で検出された掘立柱建物SB0220からちょうど9m(30尺)北に位置し、柱の筋も通っています。

その他の遺構 方墳(一辺15m)1基、土坑2基、中世以降の焼土坑2基、溝を検出しました。

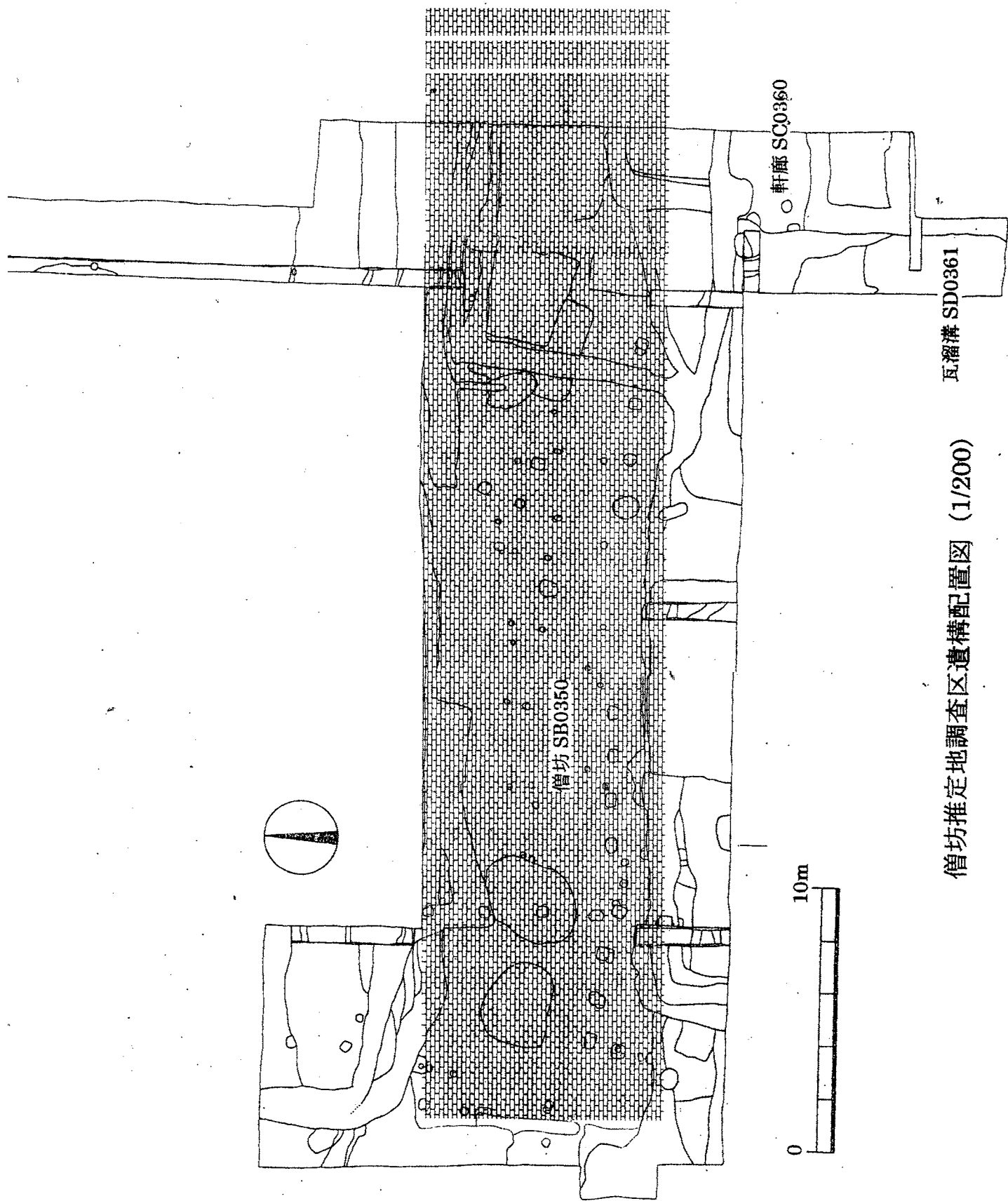
4. まとめとして

今回の調査では、主要伽藍としては僧坊SB0350を確認することができました。基壇の残存状況は極めて悪いものでしたが、南北30尺(9m)×東西240尺(72m)の規模である可能性が高いと考えます。そうであるなら讃岐(84m)・陸奥(78m)に次ぐ大きさといえます。北辺築地からの距離は^{しんしん}芯芯で約30m(100尺)、講堂からの距離は芯芯で約27m(90尺)を測り、計画的に建てられたものであることがうかがえます。講堂との間は、幅6m(20尺)の軒廊SC0360で結ばれていたとみられます。

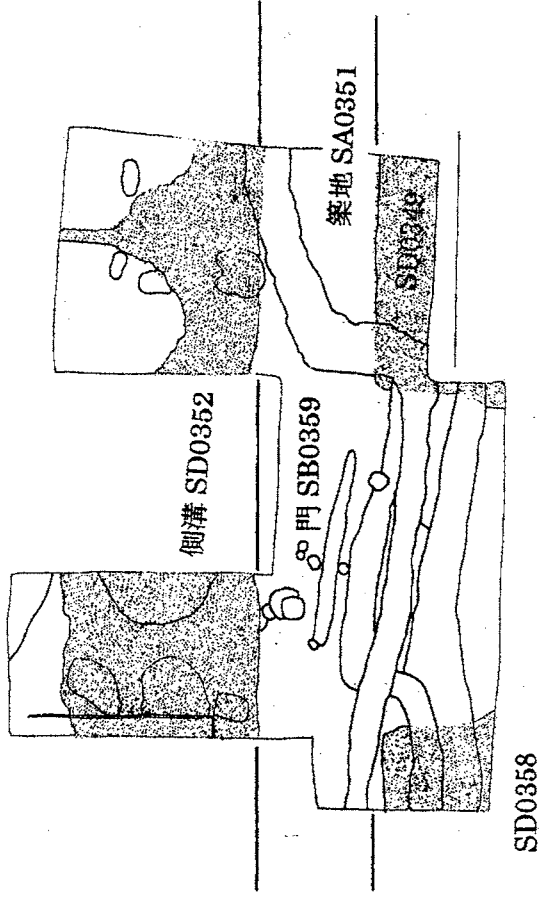
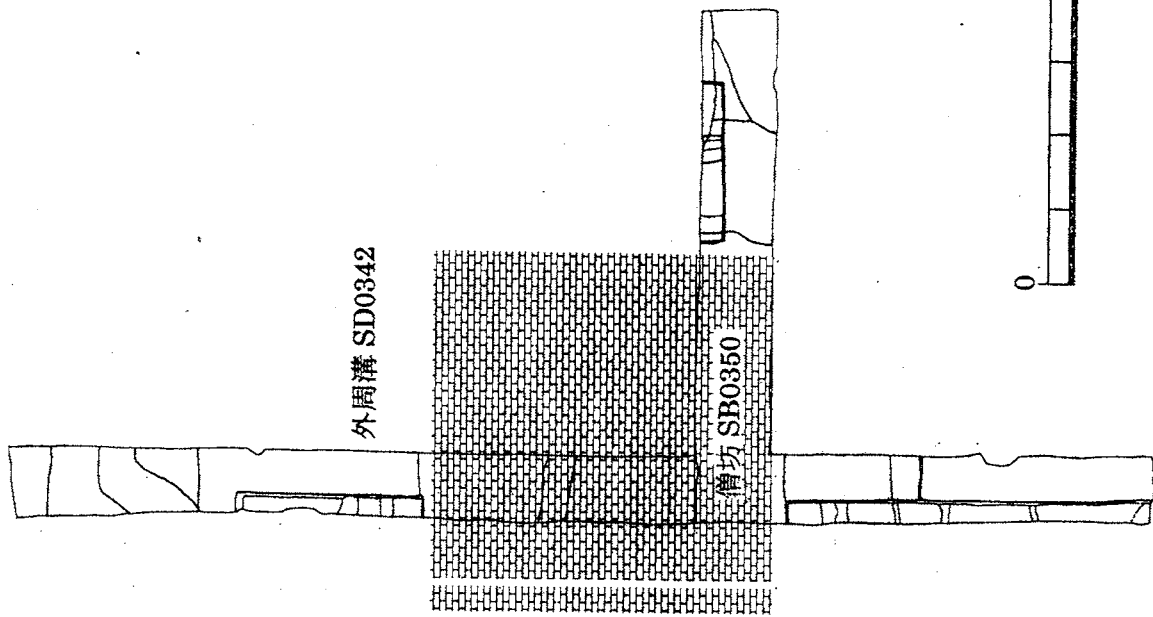
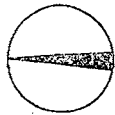
伽藍地北東の院の中心部からは大型掘立柱建物SB0302を検出しました。周囲にはこの建物に伴う廃棄土坑が多数存在します。土坑からは炭、焼土とともに、土師器、須恵器などの食膳具が多量に投棄されるなど、生活のにおいが濃く感じられる地点となっています。さらに、土坑の一つからは製塩土器がまとまって出土しました。食事用の焼塩を運んできた容器です。これらからこの建物とその一帯は^{じきどう}食堂や^{くわ}厨院、^{おおい}大炊院といった給食施設であった可能性が考えられます。

伽藍地南東の院からも、大型掘立柱建物1棟SB0301を検出しました。第28次調査で検出された、SB0220とほぼ同規模の2棟が並立していたことがわかりました。第28次調査の際にも、仮設の仏殿、仏典の講義や購読をおこなう役僧の宿舎である^{こういん}講院や^{とくいん}読院、寺院の運営にかかわる^{まんどころ}政所院そして造営に伴う寺務所などその性格についてさまざまな推定がなされましたが、残念ながら今回の調査でも特定できる遺物は出土していません。

塔は今回の調査でも手がかりが得られませんでした。伽藍地を内の築地で区画された西側の2/3のみの狭いものと考え、塔が無いことからこの国分寺を尼寺とする意見もあります。しかし、今のところ積極的に尼寺とする証拠も見当たらないので、来年度以降も引き続き塔の確認調査を続けたいと思います。

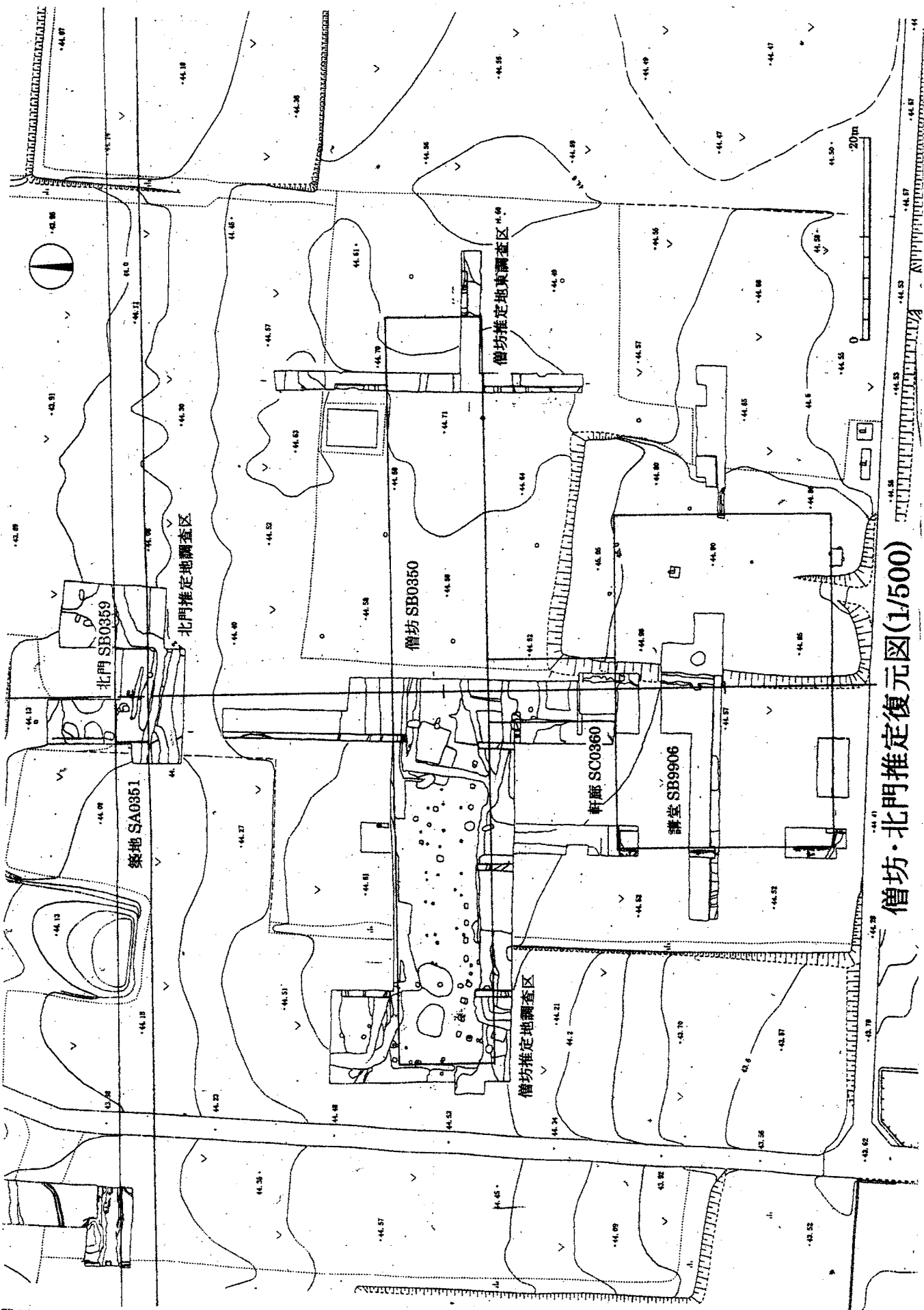


僧坊推定地調査区遺構配置図 (1/200)

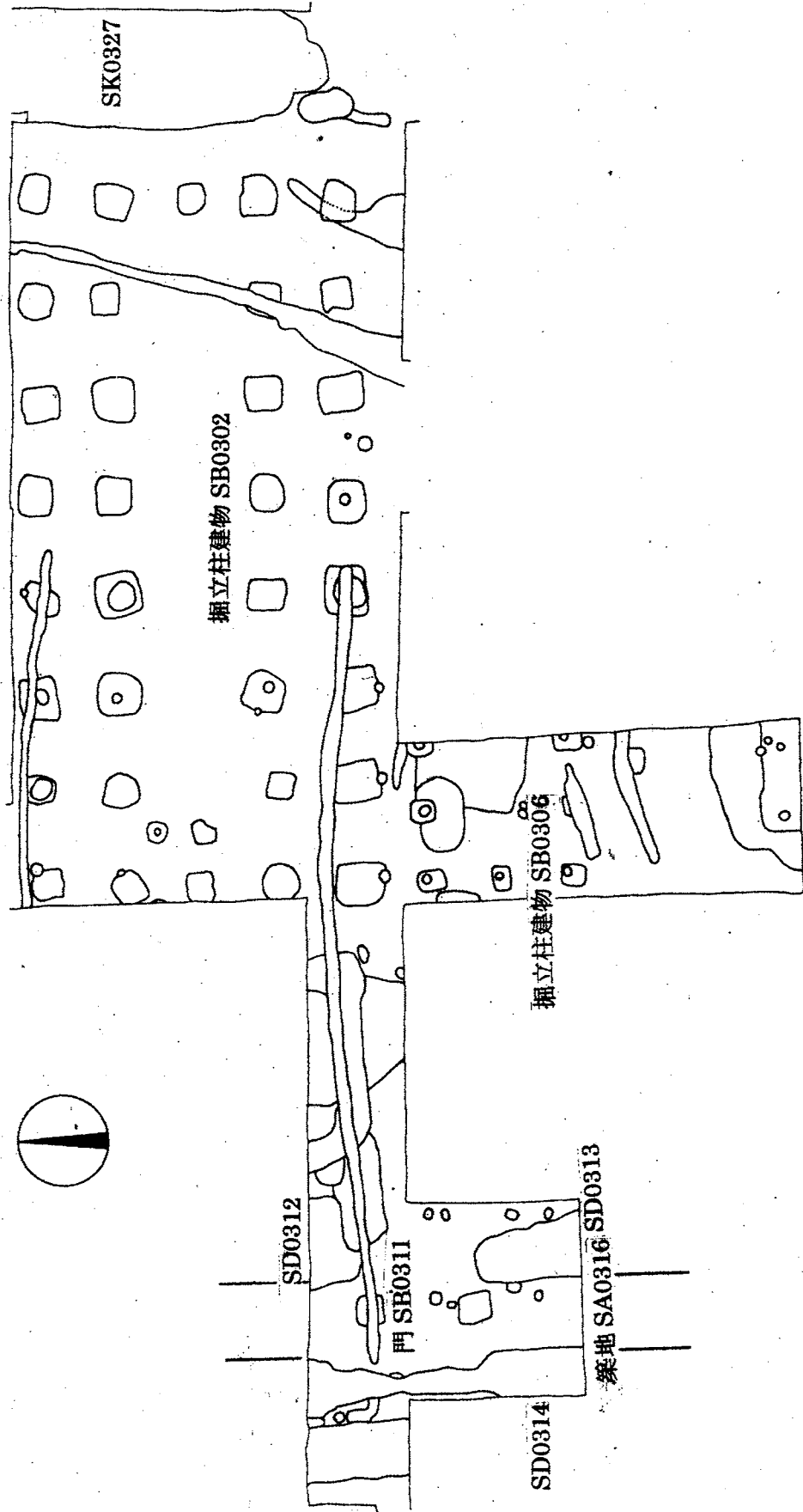


北門推定地調査区遺構配置図(1/200)

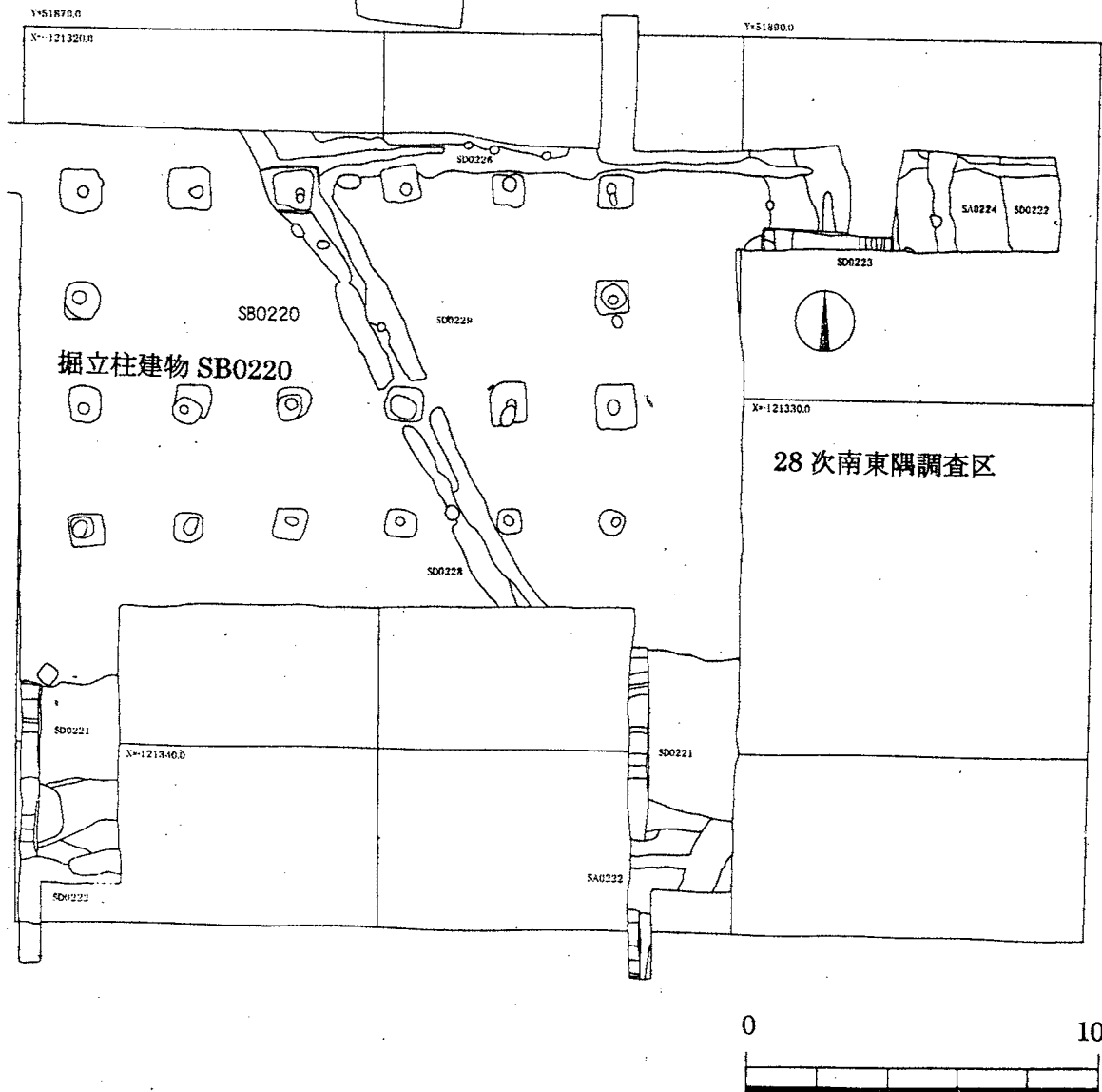
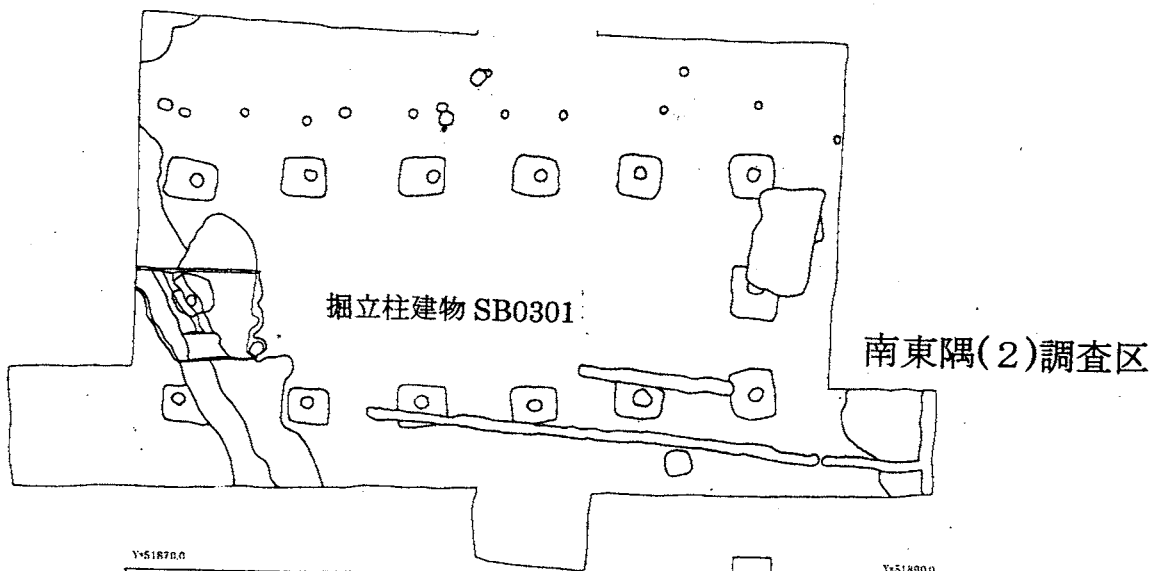
僧坊推定地東調査区遺構配置図(1/200)



僧坊・北門推定復元図(1/500)



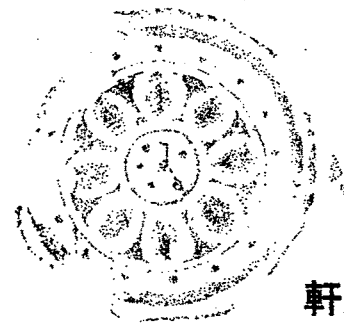
講堂東調査区遺構配置図(1/200)



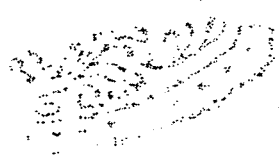
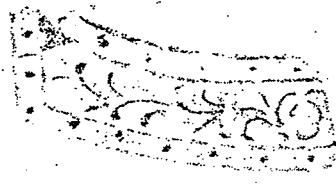
南東隅(2)調査区遺構配置図(1/200)



鬼瓦



軒丸瓦

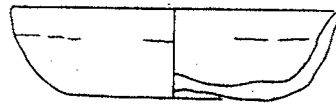


軒平瓦

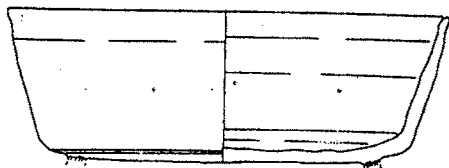
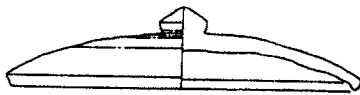


文字(押印)瓦

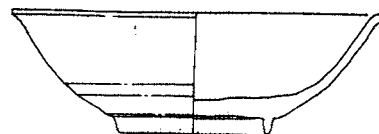
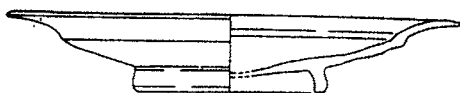
伊勢国分寺跡第 29 次発掘調査出土瓦(1/4)



土師器



須恵器



灰釉陶器

伊勢国分寺跡第 29 次発掘調査出土土器(1/3)